

First Step!

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の



First
Step!





ふーん
大事に
されてんだあ

え？

だって、それって
しみっちゃんのだ
ペースに合わせて
くれてるって
事でしょ？

やりたい盛りの
男の子にしては
紳士じゃん。

自分本位じゃ
ないって言うか。

そ、そうかなあ
お互い慣れてない
とかじゃない...？

いよいよ、
しみっちゃんは
愛されてるって
〜!!

あー私？
この前ね、彼が
どうしてもって
せがむからさあ...

み、見せたの？

そーなの
よー

って、あたしの事は
もういいよ

それより
麻美の方は
どうなのよ!?

ひとりえっちが
どーのこーの...

初めてまして又はこんにちは。神風雅と申します。
この度は本誌をお手に取って頂きありがとうございます！

今回は薫ちゃんのオナ見せ本(?)です。
数年前に出した小説本に同タイトルのものがありますが、
そちらとは少し内容が違っております。おまけで巻末に
小説版を載せておりますので、よろしければお暇潰しに
読んでやって下さいませ(昔のものなので文章がアレです、
ご容赦下さい)

他にも描きたいネタがたくさんあるのですが時系列を
すっ飛ばしたくなかったのはこちらにしました。
次はアメリカが舞台の内容になります、もう少しお付き
合い頂けたら幸いです…！

以下は続編のお話なので、未読の方や興味のない方は読み飛ばして下さい

話が変わりまして…アニメMAJOR2nd観ましたー！
連載終了当時は、まさか続編が連載されてアニメ化する
なんて思っていなかったのでも嬉しいです。
しかしBUYUDENが犠牲になった感があって、
それを考えると少し切ないかな；
中学編で萌花ちゃん似？な関西弁のでっかい子
ちゃん(アニーちゃん)が登場するんですけど、
彼女は個人的なお気に入りキャラです。
もちろん、いずみちゃんや大吾が好きなのは
大前提ですよー！
好きカブ(吾郎と薫)の子供(愛の結晶)です
から、幸せになって欲しいです。応援して
います…！

2018.4

ま
え
が
き



それで、
オナ見せしたらさー
彼、すごい喜んじゃって
大興奮♡

そのあと
盛り上がったの
なんのって。

しみっちゃんも
一回やってみなよー♡
そして感想聞かせて♡

それって…
は、恥ずかし過ぎ
じゃない？

ひとりH…

本田に見せる…

本番♡

むいっ
むいっ
あ
あ





でも、本田も
見たいのかな……

ひとりH



あたしを
見て……

興奮したり
する……？



……別に
盛り上がりたい
とかじゃないけど……

あいつが喜ぶなら……

本田になら
見せてもいいかな……



誰が興奮するって？



ギョギョギョ
本田!?

ぼわ

何でここに!?

てかあたし、声出た!?

……



何でって……

清水が「CD返して」とか言うから、持ってきてやったんじゃないか。

インターホン押しても誰も出ねーし

玄関のカギは開いてるし

不用心だから様子見に来たら……

清水は俺にオナニー見せたいって言うてるし。

言ってませんっ!!

ぼわ



み、見たいの
……？

たりめーだろ
!!

でも
まだ心の
準備が

えっ

でも

俺になら
見せても
いーんだろ？

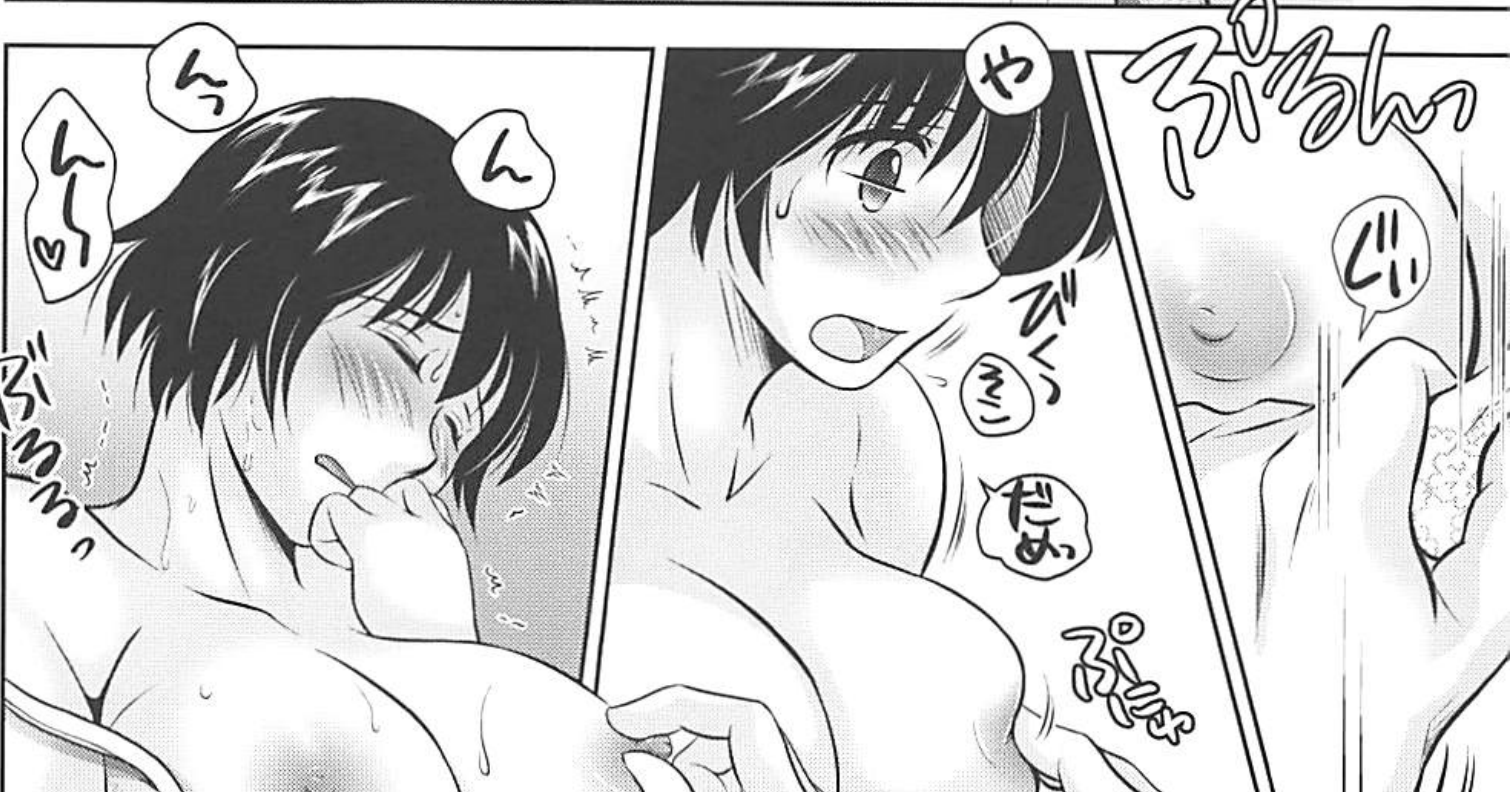


あ

ま、待って
本田

大丈夫だ、
手伝って
やっから。

かぼ



ん

や

びびん

ん

ん

だめ

びびん



↑脱ぎました。





いや、
全然大丈夫
だけど

ごめん本田!!
ケガしてない!?

はっ

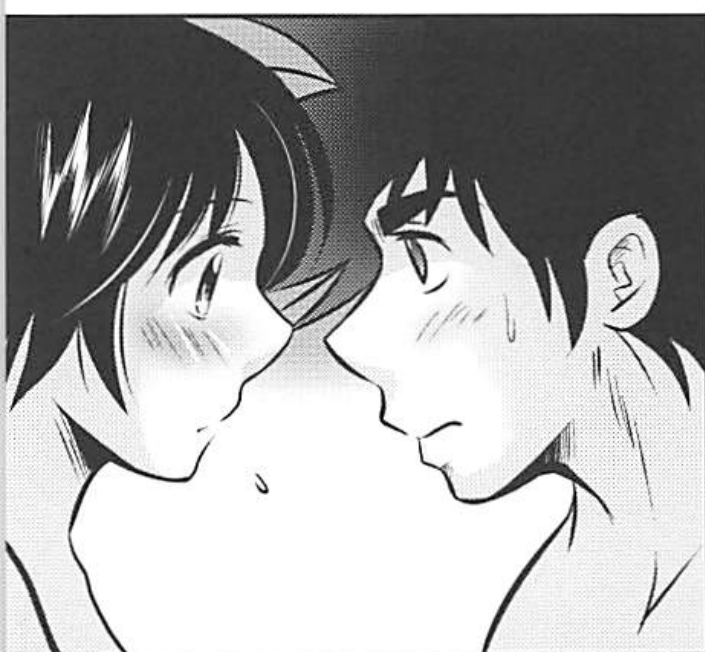
……

あたしより
本田がいい
から……

あ、ううん
そうじゃなく
て……

は？

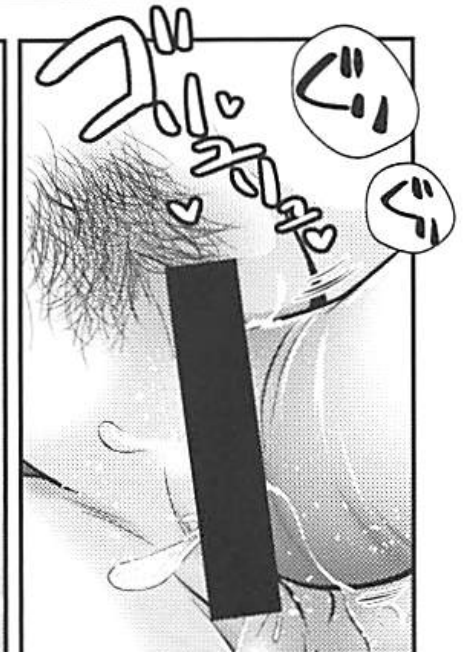
でも、わりい
……
そんなに
嫌だったか……?



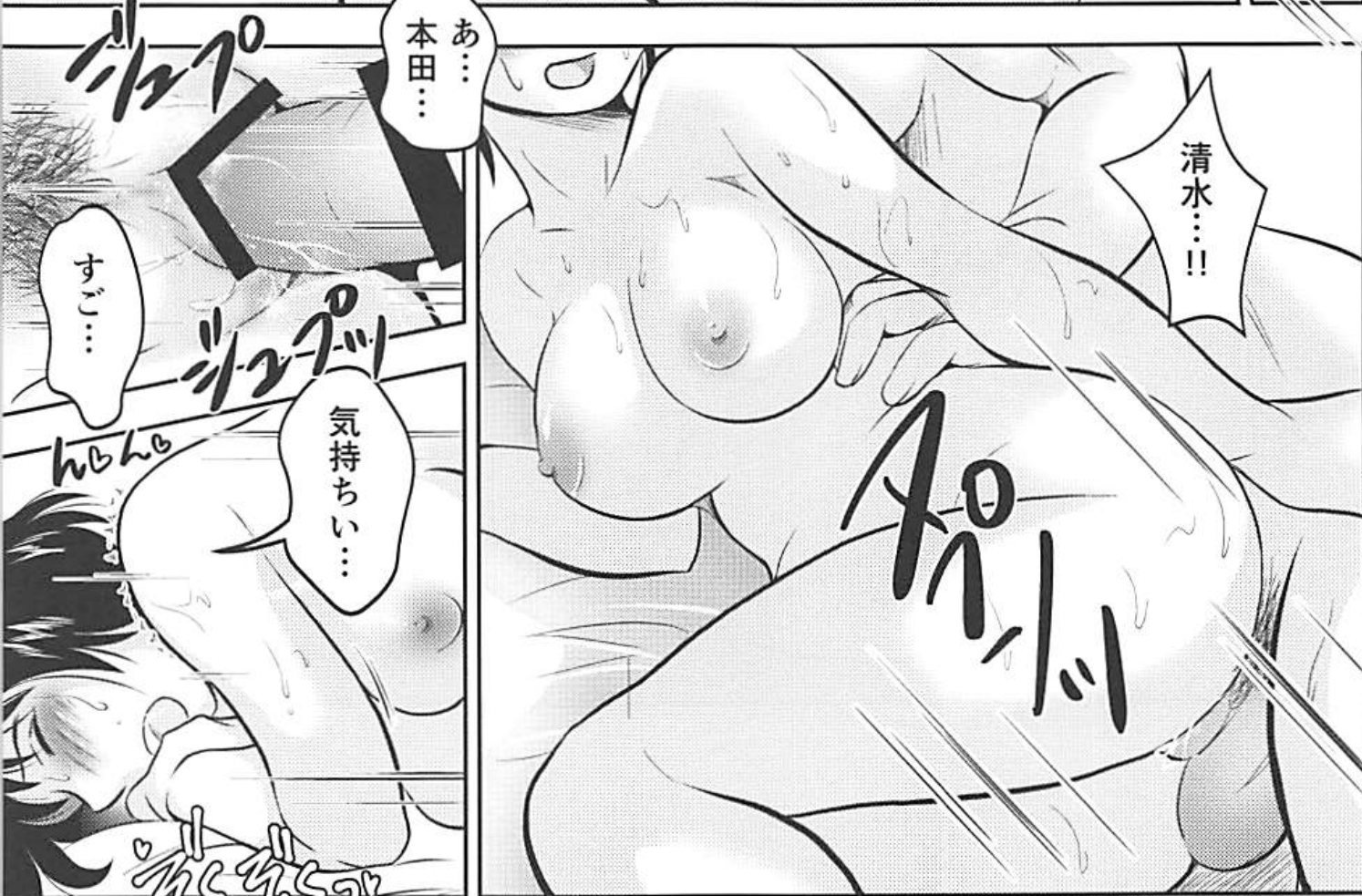


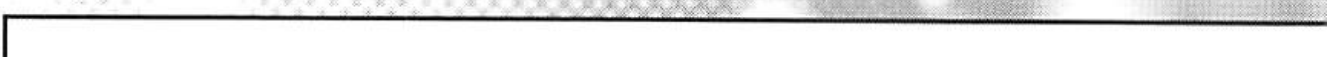
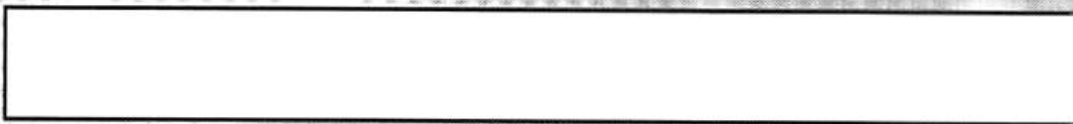
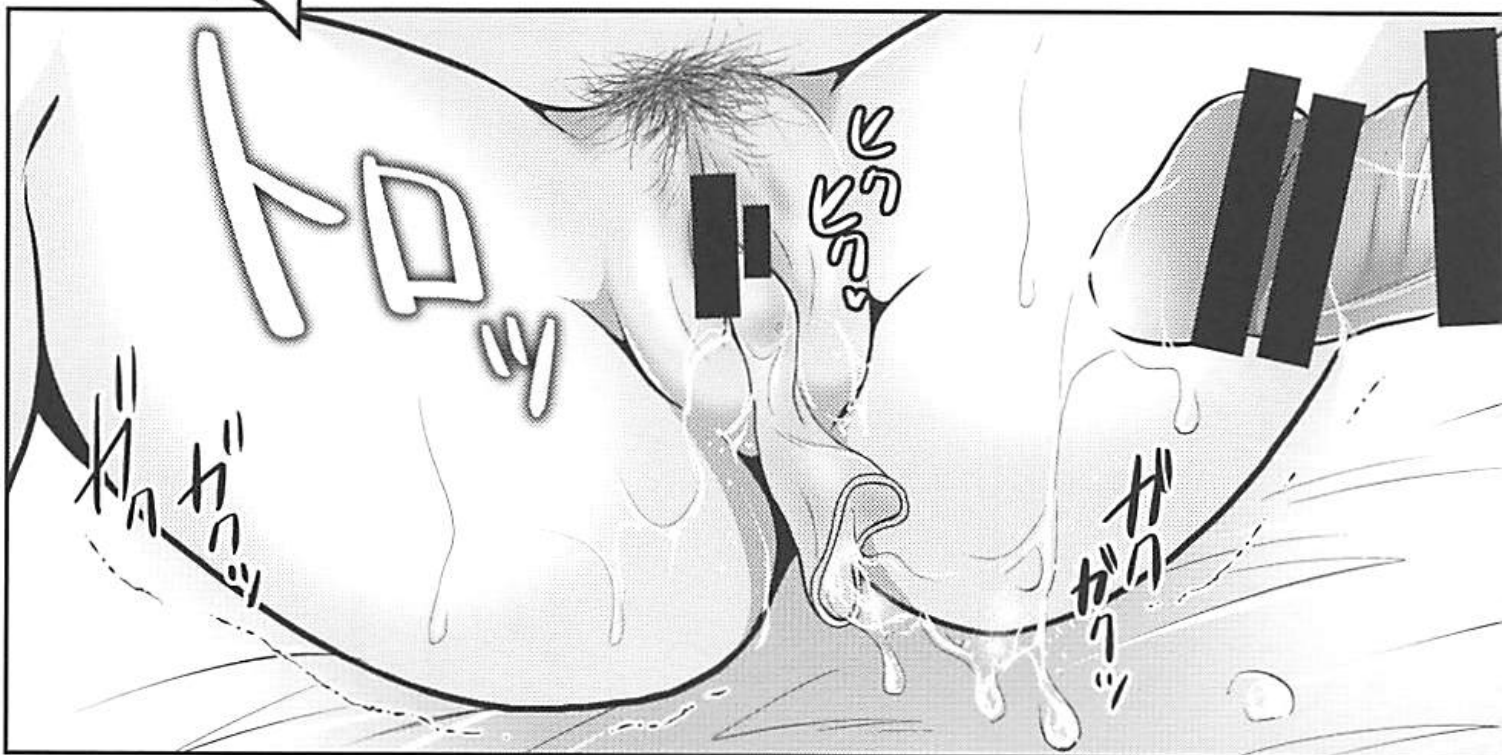














なあ、清水

んー？



さ、最近は全然してないよ……

何で？

何でって……最近本田とHしてるし……



清水は普段オナニーしてんの？

脇毛



——って、寝とる。



——それに、

本田の感覚消したくないし……



VOLTAGE



誌名 First Step!
発行日 平成30年4月30日
(COMIC1☆13)
発行元 GKボルテージ 神風雅
連絡先 <http://gkvoltage.net/>
gkvoltage@gmail.com
印刷 サンライズパブリケーション株式会社

いつもありがとうございます!

※この本は個人による非公式ファンブックです。全ての著作権元とは関係ありません。

※成人向けにつき、18歳未満の方の購入・閲覧を禁じます。

※本文の無断複製・転載・WEB上へのアップロードはおやめ下さい。

※一般の方の目に触れる場所での処分(オークション・フリマ出品など)も控えて頂けると嬉しいです。

♥二次創作への配慮を下さっている方、いつもありがとうございます!

亜麻色の髪に色素の薄い瞳がよく似合う、と薫はいつも思っていた。色が白く華奢で、でも見た目を裏切って性格はとてもしつかりしている。自分にはないものをたくさん持っている麻美は大切な友人だ。吾郎と交際を始めてからはお互いの恋愛話もするようになり、最近はやり親密感が増したような気がしている。それは麻美も同じのようで、彼女とは以前よりもオープンな話をする事が多くなっていた。

「ねえ、しみっちゃん」

麻美が身を乗り出しながら話しかけてくる。こういう仕草をする時は誰かの噂話か、恋愛関係の話が多い。あまり深刻な話ではなさそうだったので、薫は軽く相槌を打って続きを促した。大学近くのカフェは空いていて、客は外のテラスに一組、店内には自分達だけ。店に入ってから20分ほどが経過していた。

「しみっちゃんさあ、茂野くんの前でひとりHしたことある？」

「フツッ！」

突拍子もないことを聞かれて、薫は飲んでたアイスティーをグラスの中で逆流させてしまった。麻美は至って普通の表情のまま。彼女にとっては他愛のない質問なのだろう。まだまだ初心者マークの取れない薫には慣れない話だけれども。

「あるわけないでしょー!? 最近そう言う関係になったばかりだもん」

「そうなの? 覚えてたって、色々試したくなるもんじゃない?」

精一杯の返答も、ぼつさりと切り捨てられる。性的なことに関して奥手な薫にとって麻美との会話にはズレが生じてしまっていた。

「色々って……本田はどうか分からないけど、あたしの方がいっぱいいいじゃない?」

「ふーん。大事にされてんだあ」

麻美が意味深な目で見つめてくるが、薫にはその意図が読めないでいる。どうにも都合が悪くて、薫は今日に限っては聞き役に徹しようと心に決めた。麻美が喉を潤すため会話が一時途切れたのを見計らって、薫は彼女に問い掛けた。

「そういう麻美はどうなのよ?」

「ん、私? この前彼がどうしてもってせがむからさあ……」

「み、見せたの?」

麻美は「アハハ」と照れ笑いをしながら赤裸々な体験談を語り始めた。自慰を見て興奮した彼氏に押し倒され、そのまま本番行為にまで及んだことから、その後はいつになく燃えたという惚気混じりの結末まで。

ついていけない、と薫は思った。好きなひとに身体を預けるのが精一杯で、行為そのものを楽しむ余裕のない自分を薫は今さらながらに思い知らされたのだった。

「あー。もう、麻美ってば!」

薫はため息をつきながらベッドに身体を投げ出した。自宅に帰ってからというもの、カフェでの会話を思い出しては赤面ばかりしている。そんな自分が嫌になっただけで、色々試したくなるもんじゃあない?」

「リピートされる麻美の言葉。あれは、本当なのだろうか。今はこちらに合わせてくれている吾郎も、本当は冒険してみたいと思っているのだろうか。」

「そもそも、色々って何だろうか。自慰を見せ合う? 場所を変える? アダルトグッズを使う? いずれも薫にはハードルが高い。麻美が話した体験談に、相槌を打つことしか出来なかつた位なのだ。圧倒的に経験値が足りない。」

「大事にされてる、かあ……」

大事にされている、とはどういう意味なのだろうか。セックスに関して言うならば、吾郎はその性格に似合わず自分本意でないし、いつも気持ち良くしてくれているけれど……。そういう事を指すのだろうか。

数少ない経験の中からその答えを導こうと、薫はそっと瞼を閉じた。瞼を覆うように両手を重ねて、吾郎との情事を思い浮かべた。

湿度の高まった彼の部屋。シーツを手繰り寄せながら見上げると、熱の籠った瞳と出会う。

「本田……」

名前を呼ぶと、少し掠れた声で「なん

だ?」と返ってくる。

「ううん、何でもないと返事をすると「じゃあ、続きすつか」と言われてきゅう、と抱きしめられる。

大きな手のひらに全身をくまなく撫でられて、心地好さに頭の芯が痺れていく。くるくると乳輪をなぞったかと思つたとその先端を摘ままれて電流が走る。乳首を舐め、啜るさまは甘えたい盛り

の男性そのもの。身体の中に、さまざま年代の自分自身を住まわせているかのように思っていた。

「はは、もうこんなだぜ」

彼はそう言うのと照れ笑いをして、自ら陰茎を握り締めた。大きく膨らんだそれは、切っ先のくぼみから露が滴っている。まじまじと見ないように視線を上を逸らすと、もう一度目が合った。了承を待たれているような気がして、頷かずにはいられなかつた。

(ここに本田のが入って……たくさん動いて……)

薫は瞼を覆っていた手のうちの片方を、下腹部へと伸ばした。もう片方は胸へ。脳裏に浮かぶのは熱くて硬い吾郎の男性器。自分に欲情した証が、膣内を淫らに前後していく様子だった。

女の人は痛みを忘れるように出来ているのかもしれない。こういう時に思い出すのは初体験の痛みではなくて、目の前が真っ白になるあの瞬間のことばかり。

好きなひとの腕の中で迎えるオーガズ

△。考えるだけで身体が蕩ける。

「本田……」

吾郎がしてくれたことをおさらいするように、薫は乳房を揉みしだいた。脇の辺りから中心へ向けて、円を描くように解していく。すぐに布越しでは物足りなくなつて、上着の中に手が伸びた。

「……ああんツ」

指先が乳首に触れ、背中を快感が駆け巡る。固くなりつつあるそこを摘んでほんの少し力を込めるだけで、薫は身もたえてしまった。

胸を弄りながら、今度は意識を下方へと這わせていく。そちらの手はショーツを押し分け、奥深くまで進んでいた。

「すごい、濡れてる……」

人差し指が感知したのは割れ目のぬめり。これだけでしどどに濡れてしまったことに恥ずかしさが込み上げる。が、自分ひとりきりの今には必要の無い感情だ。薫はもう一度キュ、と目を瞑り直して羞恥から目を逸らした。

「本田……大好きだよ」

自らの指で、下腹部にしっとり咲く花びらを撫でさすっていく。溢れ出している蜜を指で掬い、クリトリスに塗り付けて擦る。吾郎の指でイカされたことを思い出して、自分の指でそれを再現している。

「んんっ……」

腹側の膣壁を擦られると弱いことは、吾郎に教えて貰ったことだ。自分の身体のことなのに、知らないことだらけだった。

2本の指を飲み込ませる。深呼吸をして、奥へ。吾郎と、自分しか触れたことのない秘密の場所。指をくの字に曲げて抜き差しを繰り返すと、切ないくらいに快感が波紋のように広がっていく。

「本田、そこ……気持ちいい……はあんツ」

吾郎が恋しくて堪らない。その腕で抱きしめて欲しい。その指で、そのたくましい性器で、愛して欲しい。願望だけが膨らんで、自慰を『恥ずかしい』と感じる気持ちはどうに吹き飛んでしまった。

「やだ、どうしよう……止まんない……止まんないよ……ああん、本田ア！」

イク！

下肢を引き攀らせて、薫は昇天した。膣内がきゅう、と引き締まって打ち震える。その部分だけ自分の身体ではないかのようだった。



乱れた呼吸はまだ整っていないかった。

「なーにやってんだア？」

後方からの声で、夢心地だった薫の意識はすぐさま現実へと引き戻された。聞き覚えのある声に衝撃が走る。薫は飛び起きて、声のした方へと視線を向けた。

「ほ、本田……!! どうして……」

視線の先には吾郎の姿。ドアにもたれかかって、こちらを見つめている。薫は慌てて着崩れた衣服を直し、吾郎を問い詰めた。

「もしかして……み、見てた？」

「いや、邪魔しちゃ悪いかな〜と思ってさ。でも、見たつってもちよつとだぞ？ お前すぐクタツとなつちまったし。けどびっくりだぜ。雑誌返しに清水ん家寄つたら、お前がオナ……」

「わ——!! ち、違つんだつては！」

冷静に状況を説明されることほど、恥ずかしいものはない。薫は赤面して、咄嗟に手を伸ばした。張り手ばりの勢いでおしゃべり彼氏の口を塞ぐ。吾郎はしばらくモゴモゴとやっていたが、薫がそれ以上の否定をしてこないと知ると塞いだ手を引きはがしてきた。

どんな理由をつけても、自慰をしていたという事実は変えられない。そんな弱みを見透かされたような気がして薫はたじろいだ。

「ずりいよなあ、ひとりですれむなんてよオ……」

吾郎が不敵な笑みを浮かべて、間合いを詰めてくる。

「楽しんでたわけじゃなくて……本田のこと考えてたら、手が勝手に……」

「ふーん。俺のこと考えながら、エッチなことしてたのかよ。スケベだなあ、清水サンは？」

事実はそうだが、真実は違う。いやらしいことが目的だったのではなくて、吾郎が好きだという気持ちが高じての事なのだ。けれども、薫にはそれを伝えることが出来なかった。こんな時に限って意

固地になつてしまつ自分悔やまれた。何はともあれ、沈黙は認めたと同

じ。吾郎にも、好色な女だと思われたに違いない。言い訳すら出来ずに類だけ熱くさせるだけの自分が嫌になつた。

「軽蔑、したよね……」

自嘲気味に言う吾郎は目を丸くして、こちらを凝視した。そして、あ、と思つた次の瞬間にはおでこをコツンと小突かれていた。

「バーカ、軽蔑なんかするわけないだろ。清水もやらしいこと考えたり、ひとりでしたりしてんだな〜と思つたら何だか安心したよ」

「え……？」

言葉の真意が掴めずにいると、吾郎は顎に手をやつて少し考え、改めて口を開いた。

「じゃあ、俺が清水のコト考えながらひとりでしたらどう思う？ 軽蔑するか？」

「そんな……軽蔑なんかしないよ。ちよつと恥ずかしいけど、あたしのこと考えてたんだと思つたら……嬉しい、かな」

「俺も同じなんだよ」

コホンとひとつ、咳ばらいが聞こえた。吾郎は赤くなった顔を隠すように上を向いてしまった。彼の言葉のひとつひとつを噛み締めていくうちに、薫の頬も先ほどの比ではないくらいに熱くなつた。

「だから、もっと曝け出していいんだよ。清水の全部、俺に見せてくれ」

何年も片思いをしていて、感情を隠す癖がついてしまつたのかも知れない。吾

郎の負担になりたくなくて、ひた隠しにしていた想いがそうさせていたのかも知れない。

自分のすべてを受け止めると言い切った吾郎に、頑なな心が解かされていく。まるで、春の雪解けのようだ。今なら素直に言える、そんな気がした。

「清水は、どうしたい？」

「本田と……本田と、愛し合いたい」

「俺も同じだ」

◇ ◇ ◇

「……ふ」

零れた吐息を各図に、互いのくちびるが重なった。

くちびるはすぐに深いものとなり、上唇を吸われたと思つた途端、薫は厚みのある舌にノックされた。薫は口端を緩ませて吾郎の舌を歓迎した。

舌で舌を愛撫され、唾液を絡め取られる。口内も脳内も吾郎だけで満たされていく。薫は背中にした腕に力を入れ込め

た。身体が斜めに傾いて2人の身体がベッドに着地するまで、その時間はかからなかった。

「待つて本田、自分で脱ぐから……」

黙々と服を脱がされると、こうなることが目的とはいえずかきさが倍増してしまう。吾郎の動きを遮ろうと手を伸ばすもやんわりと断られ、結局薫は下着姿にされてしまった。

背中にはシーツのするりとした布地の感触。目の前には大好きな人。真剣なま

なさしで見つめられて、鼓動が跳ね上がる。この瞳で、自分を抱くのだ。

薫は吾郎の下腹部に視線を落とした。

股間の部分が小高い山のように膨らんでいる。吾郎の陰茎がスポンの中で形を変え、窮屈そうに収まっているのが見て取れる。この先のことを想像して、薫は胸を詰まらせた。吾郎は興奮している。自分のあられもない姿を目にして、欲情している。

「清水……」

言いながら吾郎は腰を引き、ベルトのバックルを緩めた。ジッパーの下がる金属音が聞える。薫は手を掴まれ、指先をトランクスのゴム部分に移動させられた。「下げてくれ」と言いたいのだらう。いや、「確かめて欲しい」だろう。薫は胸を詰まらせた。吾郎の無言の要望に従った。ゆつくりと、愛しい男の性器をあらわにしていく。トランクスを15センチほど下げると、布地に引っかけた先端がひと息遅れて顔を出した。

剥き出しになった欲望に薫は息を呑んだ。先端がぬらぬらと妖しい光を放っている。鈴口を指先でなぞるとびくりと揺れ、素直に反応するそれは薫に愛されるのを待ちわびているようにも思えた。

「な……フェラしてくれねえか」

吾郎は、今度ははつきりと要望を口にした。熱を帯びた瞳で返事を待たれて、頬が熱くなっていく。薫は小さく頷いた。吾郎に乞われなくても、そうしていたかもしれない。

「うん、頑張ってみる」

先走りの体液を指で掬い、幹へと塗りつけていく。そのまま数回扱いたあと濡れる鈴口にキスをすると、かすかな潮のにおいがした。

キスをしていくくちびるを開いて、薫はひと息に亀頭を咥えた。唾液をたっぷりと含ませ、裏側に舌を這わせながら喉奥まで陰茎を咥えていく。収まり切れなかった根元は右手で扱き、左手は陰囊を刺激した。

「は……むう」

くちびるを後退させる時、陰茎への吸い付きを強めると行儀の悪い音が鳴った。それでも薫は構わず続けた。

「はあ、はあ……清水……」

吾郎の腰が揺れ始めている。陰囊がきゆうとせり上がり、射精が近いことがうかがえた。口の中のものも更に固くなつて、今にもはち切れんばかりだ。

髪を撫でたり、グシャグシャしたりして耐えている吾郎が愛しくて堪らない。好きな人だからこそ出来る行為を薫は一心不乱に続けた。

「じ、清水……もういいよ……」

吾郎の言葉に見上げると、切なげな表情が眉根を寄せている。気持ちの良さが伝わってきて、とても嬉しい。もつともつと気持ち良くなって欲しい。薫は顔を上下する速度を早めた。

「……やべえって、出ちま……うっ！」

「……ッ、ふは！」

薫は喉奥に熱い液体を浴びた。射精の始まりと同時に吾郎が腰を引いたので、

薫のくちびるから陰茎が抜け落ちる。支えを失つてもなお、精液はびゅるびゅると出続け薫の顔に付着した。

「げ!! わ、悪イ!!」

故意ではないにせよ、精液を顔に掛けてしまふ結果となつた事への罪悪感からか、吾郎が申し訳なきげに手を伸ばしてきた。顔に付着した精液を指で拭かれる。その指を手を取って薫が丁寧に舌を這わせると、吾郎は驚いて目を丸くした。

「ん……美味し」

濡れた指先を舐め取った後、精液を滲ませている陰茎にも舌を這わせて綺麗にしていく。その間にも吾郎の陰茎は驚異的に回復していき、すぐに臨戦態勢となつた。

「……清水！」

熱い吐息と共に名前を呼ばれて、きつく抱きしめられる。薫も吾郎の思いに応えて首根に腕を回した。ぬるぬるした体液がお互いの身体に付着するのも構わず絡み合つて、そのまま溶けてしまひそうなきがした。

「なあ……入れていいか」

頷くと抱きしめていた手が解かれて、吾郎の手が下腹部に伸びる。両足を大きく開かれて秘所を見つめられるだけで、薫はぞくりと身震いした。

割れ目に宛がわれた指が前後に動いて、くちゆりと淫らな音を聞かされる。もつと撫でてと勝手なおねだりをする秘所に赤面しながらも、薫は吾郎の陰茎を心待ちにした。

「いくぞ」

秘所を左右に押し広げ、綻んだそこに先端がのめり込む。ぬめりで抵抗の少なくなった膣内はあつという間に吾郎で満たされた。

「はああん……おつきい……」

みっちり入り込んだ陰茎が馴染むのを待つて、吾郎の律動が始まる。軽くキスをされ、腹の上側を擦られ、薫は否応なしに高められていった。

「う……ん、はああんっ」

一回射精している吾郎は少し余裕のようである。薫の快楽を優先してくれている。性急さの無い丁寧な揺さぶりに薫は翻弄された。今にも達してしまいそうだ。薫はかぶりを振って訴えた。

「だめ……だめ、だめ」

「ダメって顔してねえじゃん」

「違っただってば……あ、やあ……い、く、いっちゃん……!」

薫は呆気なく2度目の昇天を迎えた。膣内が急激に引き締まって射精を促すも吾郎は眉根を寄せるだけで、止まらないピストンに気が狂いそうになる。オーガズムによつて身体が敏感になったのか鈍感になったのか、それすらもわからないまま貫かれて薫は身体中から汗を吹き出した。

「や、あ……やだ、やだ、やめて……お願い……おかしくなっちゃう」

結合部から空気を孕んだ卑猥な音が聞こえてくる。いやだと言いつつも蜜を流し続けて悦んで、心と身体がバラバラになつてしまつたかのようだ。吾郎を求め続ける貪欲な身体が恨めしい。薫はいやいやを続けた。

「おかしくなつた清水も見せてくれよ。大丈夫だから。曝け出していいんだよ」

「本田……」

抱えられていた足が解かれ、吾郎の身体が密着してくる。その安心感に宥められて薫は顔を閉じた。ひと呼吸置いて、徐々に自分を解放していく。気持ちのいい所を掠めてくる吾郎の動きに集中して、そこから湧き出る快楽に身を任せ

た。

「ほら、ここ。気持ちいいんだろ？」

「……うん、うん……気持ちいい、気持ちいいよ本田あ……!!」

事実を素直な言葉にした途端、薫は達した。ガクガクと震える下半身を押しえられ、尚もまだ抜き差しが続けられる。荒い吐息が耳朶に降り懸かつて、吾郎もクライマックスに向かつている事が分かった。薫は吾郎の腰部に足を回して下半身を密着させ、彼の動きをサポートした。

「本田も……本田も気持ちいい？」

「ああ、気持ちいいよ……もう出ちまいそ」

腰の動きが一段と遅しく、早くなつていく。子宮口にキスを繰り返してくる吾郎の顔は切なげで、それを見るだけで薫は感情を高ぶらせた。

「清水、出すぞ……ッ!!」

きつく締まっている膣壁を押しつけて、剛直が弾ける。薫は子宮に大量の熱

い飛沫を浴びた。

びゆくびゆく脈打つ陰茎を体内に感じながら、高みに昇っていく。ドロリと染みゆく白濁と共に意識も蕩けてしまいそうになつて、薫は大きな背中にしがみついた。

「あああ——ッ!」

羞恥心が吹き飛び、あられもない声が口をついて出てしまう。薫は深いオーガズムを迎えた。

「んうううん、本田あ……あ——、あ——っ!!」

吾郎の精を取りこぼすまいと、欲深な膣内が痙攣を繰り返す。吾郎の顔が歪み、その途端陰茎がまた弾けた。吾郎は腰を左右に振って、最後の一滴まですべて薫の膣内にそそぎこんだ。

吾郎の形に合わせて拡張された秘部は、陰茎が抜け落ちてからも物欲しげにヒクヒクと蠢き、逆流してくる精液を膣内に留めようとしていた。

◆ ◆ ◆

「なあ、本田」

クセの強い髪に意志の強そうな瞳と眉毛が印象的だ、と薫はいつも思っていた。名前を呼ぶと気たるそうに視線を寄越して、それから少しだけ目尻を緩ませる吾郎は誰よりも愛しい人だ。思い返せば赤面してしまつたような時間を過ごして、性的な面での2人の距離がだいぶ縮まつたような気がする。そもそも吾郎の

方には壁などなくて、それを作っていたのはこちらだけだったかもしれないけれども。

「——何だ？」

話し掛けておきながら何も言わないでいたためか、吾郎から続きを促される。

「ああ、えーつと。本田も、色々試してみたいって思ってるのかなあ……って、ね。……ちよつと、気になつて」

「はあ？ 全く意味が分かんねえんだけど。具体的に言つてくれよ」

「だから、その……例えば、お風呂場でHしたいとか、そういうの、考えてたりするかって事!」

「へえ」

ニヤニヤと笑いながら見つめられて、薫は頬を染めた。聞かなければ良かったと後悔した。吾郎の口から思わぬ言葉を聞かされるまでは

「俺はもつとスゲー事考えてたりするぜ」

「え……」

「聞きてえか？」

返事を待たずに耳元で囁かれて、薫はますます頬を染めた。聞かされた内容に思わず激しく抵抗してしまつた。

「無理無理無理無理!」

「大丈夫だつて。おまえがしてもいいって思える時まで待つてつから。でも、その気になつたら必ず言つてくれよな?」
屈託なく笑う吾郎に、薫の気が遠くなつたのは言つてもない。

A manga-style illustration featuring a woman's back and buttocks. She has short brown hair and large, expressive eyes. She is wearing a white bikini top with a pink lace pattern. A hand is placed on her right hip. The background consists of pink horizontal lines. The text 'GORO ♥ KAORU' is overlaid on the image.

GORO ♥ KAORU

The logo for 'VOLTAGE' is located at the bottom of the page. The word 'VOLTAGE' is written in a bold, purple, stylized font with a white outline. The letters are set against a background of two baseballs, one white and one yellow, both with red stitching.

VOLTAGE